

コロナ禍におけるオンラインの強みを活かした 視覚障害児・者に対する実践報告

奈良 里紗（長野大学社会福祉学部）

相羽 大輔（愛知教育大学特別支援教育講座）

増田 雄亮（湘南医療大学保険医療学部リハビリテーション学科）

御園 政光（視覚障がい者ライフサポート機構“viwa”）

谷田 光一（視覚障がい者ライフサポート機構“viwa”）

要旨：

目的：2020年は新型コロナウイルスの影響を受け、新しい生活様式が求められている。その1つにオンラインを活用した取り組みがある。オンラインの強みを活かすことで新たな可能性が見えてきた。本稿では、2020年度に視覚障がい者ライフサポート機構“viwa”が行ったオンライン形式の実践を報告することを目的とする。

方法：①セミナー形式の視覚技藝、②子育て支援相談会パパママ会、③アクセシビリティゲーム大会、④健康講座、⑤viwa Beauty、⑥視覚技藝 for Teenager、⑦親子料理教室の7つのコンテンツについて、活動目的、実施方法及び参加者、実施内容について取り上げた。

結果：視覚技藝では、講演内容を録画し後日YouTubeにて一般公開することで、これまで以上に当該領域に関する情報発信が容易となった。また、これまで対面ではないと難しいと考えられていた運動、スキンケアやメイク、料理等も工夫次第で実施可能であることが示唆された。

考察：今後の課題として、①オンラインツールの活用に関するIT支援の必要性、②オンライン活動に関する情報保障のガイドライン作成の必要性、③オンラインと対面の活動の精査が指摘された。

キーワード： コロナ禍、オンライン活動、遠隔支援、家族支援

1. 目的

本報告では、視覚障がい者ライフサポート機構“viwa”（以降、当団体と表記）がコロナ禍において2020年4月から実施したオンライン活動について報告する。

2. 視覚技藝

2.1. 目的

視覚技藝は、「すぐに誰でも活用できる知識や技術の提供」をコンセプトに実施しているセミナー形式の活動である。

2.2. 実施方法及び対象

視覚障害者に対するアクセシビリティに定評のあるZoomを用いて実施した。視覚技藝は参加条件を限定していないため、医療・教育・福祉などの専門職から当事者、当事者家族、学生等の参加があった。

2.3. 実施内容

最初の緊急事態宣言下であった2020年5月1日にシアトル在住の田中恵氏をゲストに招き、「新型コロナウイルス蔓延下にあるアメリカの視覚障害者の今」というテーマで視覚技藝を緊急開催したところ、企画からわずか1週間後の開

催であったにも関わらず約70名の参加があった。この時期、社会は急激な変化を迎えており、対面を避けオンラインによる活動が模索されはじめていた。一方で、オンライン活動に視覚障害者が参加できず情報格差への懸念が広がっていた。そこで、全国的に先駆的にオンライン活動を取り入れている認定NPO法人タートル理事の大橋正彦氏、きんきビジョンサポートスタッフの原田敦史氏、一般社団法人日本視覚障がい者美容協会代表理事の佐藤優子氏、日本視覚障害者団体連合青年協議会会長の片平考美氏、当団体スタッフの谷田光一氏の5名に、各団体に視覚障害者を対象にしたオンライン活動の工夫や支援体制について共有する場を設けた。この視覚技藝はわずか2日で定員の100名に達し関心の高さが伺えた。

その後、9月は読書バリアフリー、10月は中途視覚障がい者の日常生活の知恵、11月は地域格差、12月は海外旅行、1月は10代の視覚障がい生徒のリアル、2月はアメリカの歩行訓練(奈良・佐藤, 2021)についてそれぞれ取り上げ、講演会部分は全て当団体のウェブ上にて公開した(表1)。

3. パパママ会

3.1. 目的

視覚障害児の親が気軽に相談したり、親同士のつながりを作ったり、情報交換をしたりすることを目的に子育て支援相談会パパママ会を実施している(奈良, 2020; 奈良ら, 2020; 奈良ら, 2019; 奈良・相羽, 2018; 奈良ら, 2017)。

3.2. 実施方法及び参加者

あらかじめ、親に開催希望曜日と時間帯を聴取し、希望の多かった金曜日ないし土曜日の夜21時ごろからZoomを用いて開催した。子どもの寝かしつけ等があるため入退出は自由とし、母親だけではなく父親も参加できるよう配慮した。なお、実施にあたっては愛知教育大学特別支援教育講座の相羽大輔先生の協力を得た。

3.3. 実施内容

2020年4月上旬に初めてオンライン形式でのパパママ会を実施した。このときすでに学校

表1 視覚技藝講演動画一覧

テーマ	
新型コロナウイルス蔓延下にある アメリカ視覚障害者の今 実施報告	
視覚障害者を対象とした オンライン活動	
読書バリアフリーを考える	
中途視覚障がい者の日常生活の 知恵オンライントークセッション!	
地域格差	
海外旅行	
10代の視覚障がい生徒	
アメリカにおける歩行訓練	

が臨時休校になって1ヵ月以上が経過しており、視覚障害児は十分な支援を受けられない状況にあった。そこで、静岡県立静岡視覚特別支援学校の海野(片平)考美先生に協力を養成し、家庭でできる学習支援アプリや学習方法を共有してもらった。また、経過観察が必要な眼疾患のある子どもの保護者から不要不急をどのように判断したらよいのかという相談があり、これには眼科医に応じてもらった。さらに、子どもの歩行訓練に関する相談があったことから、視覚障害児の歩行訓練に長年携わっている公益財団法人日本盲導犬協会富士ハーネスの歩行訓練士である堀江智子氏に「歩行訓練・白杖について考えよう」というテーマで話題提供をしてもらった。このときは、海外で視覚障害児を育てる日本人の保護者の参加もありオンラインの強みを活かしたパパママ会となった。

4. ゲームを活かした取り組み

4.1. 目的

コロナ禍における余暇活動のひとつとして、

オンラインでのゲーム大会や、ゲームアクセシビリティに関するシンポジウムを、当団体と協力団体（NPO 法人 IFP、公益社団法人 NEXT VISION）の共催で実施した。このうち、シンポジウムについては相羽・三宅（2021）にて詳細を報告したことから、ここではゲーム大会について報告を行う。

4.2. 実施方法及び参加者

ゲーム大会は9月4日の13時から16時の間でオンライン開催した。ゲーム大会の参加者は22名であり、視覚障害や運動障害のある子どもや大人、そのきょうだい児、健常者など多様なプレイヤーが参加した。参加者は指定されたゲーム機（Nintendo Switch）とソフトを準備し、ホスト側のゲーム機を介して、オンラインで対戦した。これだけでは、音声共有できないため、参加者とホスト側をZoomでつないだ。ホスト側は、ゲーム機の映像と音声をキャプチャーボードからPCに入力し、その内容をZoomで画面共有した。その様子はYouTubeでライブ配信することで、観客にも届けられた。なお、ゲーム大会の参加者と観客には、視覚障害者も含まれたため、視覚障害教育を専攻する大学院生が実況中継に加わった。

4.3. 実施内容

ゲーム大会の前半は格闘ゲームをトーナメント形式で行い、後半はレーシングゲームを総当り戦で行った。毎回、試合の前には、参加者同士で自己紹介を行ってもらうことで、どのような人と対戦しているのかをわかるようにした。また、視覚障害や運動障害のある参加者からは、格闘ゲームのステージギミックや、レーシングゲームのコースアウトがあると、円滑にプレイできないという意見が出されたため、そうならないようゲーム設定を変更した上で、大会が行われた。ゲーム大会は当日も大盛況であったが、最大の成果は、参加者同士を自然につなげたことにある。当団体には、ゲーム大会に参加した全国の子どもたちとその保護者が、後日、週末と一緒にオンラインでプレイを楽しむようになったという声が、届けられた。

5. 健康講座

5.1. 目的

コロナ禍で運動不足に陥りがちな視覚障害児・者に対して、安心・安全に体を動かす機会を提供することを目的に実施した。

5.2. 実施方法及び参加者

一般社団法人チャレンジドヨガ～視覚障がい者のためのヨガ～の代表理事である高平千世氏に協力を依頼し、Zoomを使ったオンライン形式で実施した。2020年4月、5月、6月、9月、10月は視覚障害児とその親を対象とした親子クラス、2020年12月～2021年1月、2月は視覚障害者を対象とした健康講座として開催した。

なお、実施にあたっては参加者が心地よく参加できるように講師がポーズをチェックするカメラチェックの有無を参加者が主体的に選択できるように配慮した。また、カメラチェック希望の視覚障害者に対しては30分前に入室してもらい座位、立位及び寝ポーズでのカメラ位置の確認を行った。

5.3. 実施内容

親子クラスでは、保護者のサポートを受けながら視覚障害児がボ「良い姿勢や猫背」等のディイメージを形成したり、バーバリズムを解消したりできるような指導や親子でふれあいながらコミュニケーションを促進できるような内容を取り入れた。

健康講座では、肩こり解消や免疫力UP、体幹トレーニング等、それぞれ具体的な目標をもって参加できるようなプログラムを実施した。

6. viwa Beauty online

6.1. 目的

視覚障害者の美容やおしゃれ、ファッションなどに関する情報を発信することを目的に実施していたが、コロナ禍で対面でスキンケアセミナー等の実施が困難になったことから2020年10月よりオンライン形式での参加型セミナーを開始した。

6.2. 実施方法及び参加者

視覚障害者が自宅でオンラインでスキンケア等について学ぶ環境を整備するため、①使用す

る商品をセミナー前に自宅に郵送、② Zoom のカメラを使用したビデオ会議の環境を整備、③ 言語的なフィードバック環境を整えた。また、商品提供やレクチャーについては長年視覚障害者向けのメイクセミナーを開催している株式会社ファンケルの協力を得た。

6.3. 実施内容

2020年10月に最初となる視覚障害女性向けスキンケアセミナーを実施したところ、男性向けにもやってほしいというニーズが寄せられ、11月に男性向けスキンケアセミナーを開催した。2021年1月にはチークと口紅、2月はサプリメント、3月と4月は異なる効果・効果のあるスキンケア商品を使ったセミナーを開催した。画面越しでも指使いの強弱等十分にフィードバック可能な内容がある一方で、実際に触れて直接的なフィードバックができない分、いつも以上に言葉による丁寧な説明が求められていた。

7. 視覚技塾 for Teenager

7.1. 目的

視覚障害のある10代の生徒を対象とした交流の場をオンラインで提供することを目的に実施している。

7.2. 開催方法及び参加者

生徒同士がやりとりをするためにLINEグループを使用している。そのため、参加条件として生徒本人のLINEアカウントを所持していること、また、Zoomによるオンライン会議に参加できることとし、保護者の参加は認めていない。2021年4月現在、中学生から大学生まで12名が参加している。

7.3. 実施内容

2020年5月より毎月1回程度オンラインで集まりを開催している。事前にLINEグループ上で話題にしたいテーマを出し合い、これまでにアルバイト、友達関係、白杖、進学、障害受容、障害者年金、デジタル教科書等、その時々で彼らが抱えている悩みを共有し、お互いにアドバイスをしあっている。なお、この活動の様子はNHKの視覚障害ナビラジオで取り上げられた(NHK 視覚障害ナビラジオ 10代のリアル～視覚

障害者・若者の声～

<https://www.nhk.or.jp/heart-net/shikaku/list/detail.html?id=47269#contents>

8. オンライン親子料理教室

8.1. 目的

ADLの1つである調理について、視覚障害児とその親が体験する機会を提供し、家族の一員としてできるお手伝いを増やすことを目的に実施した。

8.2. 実施方法及び参加者

調理の進行具合等を適宜確認するため、ビデオ会議システム(Zoom)を用いたオンライン形式を取り入れた。調理中は講師の声が聞き取りやすいように参加者はミュート設定とし、調理の進行具合は○や×等をジェスチャーで伝える工夫をした。

8.3. 実施内容

2020年5月は野菜の肉巻きとカスタードクリーム、7月はスコップコロケとミルク寒天、2021年3月はポトフといちご大福を作った。いずれも、電子レンジを活用したり、触覚的に楽しんで調理できたりするよう工夫されており、参加した子どもの中には後日一人で調理に取り組む姿も見られた。オンラインの強みとして、自宅という普段使いなれた環境でできること、家族で作るためスキキライに合わせてレシピのアレンジが可能なこと、手についたあんこをなめてみたり生野菜をかじったりする等、対面形式ではできないようなことを体験として提供できた。

9. 今後の展望

2020年はオンライン活動元年ともいえる一年になった。活動内容により、オンラインの強みが活かせる部分と難しい部分が表裏一体となっている。今後の展望として、①IT支援の充実、②情報保障の在り方、③活動の精査があげられる。①については各地域の専門機関等が率先して視覚障害者がオンラインツールの活用ができるよう支援が必要である。当団体ではコンテンツの提供を役割としており、個別のIT支援は専門機関の役割と考えるからである。実際に、専

門機関に相談したが支援提供を断られたというケースもあり、専門機関の早急な支援体制の整備が必要であろう。②については、多様化するオンラインツールがある中でそれら全てが視覚障害者がアクセス可能なものへと基礎的環境整備を推進すると同時に、視覚障害者が参加する上での情報保障の在り方を検討する必要がある。例えば、チャットを活用する場合、音声読み上げソフトがチャット内容を読み上げてしまい話者の音声聞き取りにくくなることに対する方略をガイドラインとしてまとめ、全てのオンラインイベント主催者がそれらにアクセスできるようにすることが急務である。③については、オンラインの強みと対面の強み両者を適切に評価し、バランスのとれた活動を展開することが重要であろう。いずれにしても、まだ始まったばかりの新たな取り組みであるため、関係機関と連携をとりつつ、コロナ禍においても視覚障害児・者とその家族が豊かな生活を送ることができるよう活動のブラッシュアップを行っていく必要があると考える。

謝辞

当団体の事業は、東海テレビ様、名古屋市視覚障害者協会様、愛盲報恩会様、そのほか参加者の皆様からの寄付により実施されている。この場をかりて、厚く御礼申し上げたい。また、

当団体の事業を実施するにあたり、多くの関係者の皆様のご尽力を賜ったことに対して謝意を表す。

文献

- 奈良里紗・相羽大輔・加藤芳子・上杉相良・岩池優希（2017）盲学校と視覚障害当事者団体による家族支援活動の効果—保護者及び盲学校教員への調査から—。障害者教育・福祉学研究 13, pp17-22.
- 奈良里紗・相羽大輔（2018）視覚障害当事者団体による家族支援の取組—2016年度調査からみる改善—。障害者教育・福祉学研究, 14, 37-41.
- 奈良里紗・相羽大輔・上杉相良・鈴木みち子・鳥居信吾・小沢素子・片平考美・桑山莉帆・尾原健太・飛田崇・佐藤愛・辰巳沙羅（2019）宿泊を伴う視覚障害児とその家族支援の意義—主体的活動に重点を置いたプログラムに関する実践報告—。障害者教育・福祉学研究, 15, 9-18.
- 奈良里紗（2020）「ごめんね」から「ありがとう」へ—地域で学ぶ盲児の物語—。スリースライス.
- 奈良里紗・相羽大輔・鳥居信吾・尾原健太（2020）視覚障害児に対する「確かな体験」を育む指導プログラムに関する実践報告。長野大学紀要, 42(1), 145-155.
- 相羽大輔・三宅琢（2021）ゲームのアクセシビリティが視覚障害児・者の医療・教育に与える価値。障害者教育・福祉学研究, 17, 79-83.
- 奈良里紗・佐藤由希恵（2021）アメリカの歩行訓練士養成課程での学び。インプレス R&D.